

「認知度の違いによる景観評価への影響」

Consideration about the influence on the scene evaluation by the difference in the degree of cognition

国土交通省 北海道開発局 正員 箱石 憲昭 正員 井出 康郎 吉田 浩幸
国土交通省 北海道開発局 高橋 幸一 (株)ジオスケープ 正員 須田 清隆

1. はじめに

近年、事業の計画策定などにパブリック・インボルブメント（住民参画）が求められており、そこでは多様な価値観、判断基準を有する人々間の合意形成を図るためのプロセスが必要とされる。

なかでも、個人としての基本的性質を重要視して、行動パターンのうち一番わかりづらく理屈で説明が難しい感性的行動の評価、分析が必要になってくる。

本報では、この人間の本能的特性の感性に起因した景観の評価について、事業の認知度（人間の知覚量や経験量）を考慮して、調査を行った結果をまとめたものである。

2. 景観の評価構造

景観デザインで重要になるのは、「誰のための景観か」、「景観を誰が評価するか」、また、「景観とともに経過する時間を何時まで想定すべきか」という問題である。景観とは、空間にある景（scene）に対して人が視覚することで成立するもので、景観に対する『良い』とか『悪い』の評価は、景を観ている人の価値観に依存していると言われている。このため、景観の評価は、個人の価値判断に左右されることが多く、公共性としての地域合意のある評価を難しくしている。このことが景観を評価するにあたっての大きな課題となっている。

3. 調査対象

調査の対象としては、北海道留萌市に建設中の留萌ダムを選定した。留萌ダムが建設されている留萌川は、頻繁に洪水を起こしてきた河川であり、特に昭和63年の大洪水は市街地の3分の1が浸水し、住民の多くが洪水経験者である。

4. 調査方法

ダム整備空間の主要視点場の整備イメージ案(CG画像)を1つの視点場につき3ケース作成し(図1参照)、全6視点場に対してSD法によるアンケート調査を行った(図2参照)。但し、被験者には1視点場について一枚の景観写真を提示する方法をとり、一人の被験者が同じ視点場で3ケースを比較評価できないように配慮した。

アンケート調査は、一般の留萌市民（以下A-GR）とダム事業の興味を持つ市民（以下B-GR）に対して実施した。A-GRには、毎年8月に実施される留萌

川まつりの参加者の中から、またB-GRには、平成15年9月に開催された留萌ダム見学会の参加者を対象にした。なお総被験者数は310人である。



図1. 各視点場の景観CG

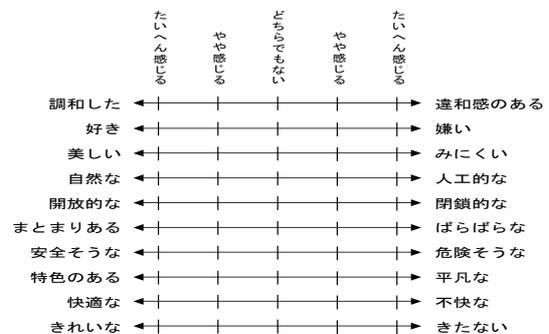


図2. 写真に対する印象の評定に用いた形容詞対

5. 調査結果

調査結果を図3に示す(視点場A、視点場B、視点場Cにおける各グループの平均値)。すべてのケースにおいてA-GRよりもB-GRの方が好意的な印象を示している。

a) 視点場A

視点場Aは、ダム空間エントランス部の視点である。ケース1,2が開放的なイメージを、ケース3は従来の官公庁の施設のような管理的なイメージを表現している。A-GRがケース2の植樹配置の案

に「好き」「美しい」の形容詞に好感度を示しているのに対し、B-GR は、ケース 3 の「管理型」に対して好感度を高めていた。

b) 視点場B

視点場Bは、洪水吐上部の橋梁からダム下流広場を展望する視点場である。ケース毎に下流広場の植栽の量を変更している。

A-GR は、各ケースともに人工的イメージを強めていたが、B-GR は、自然なイメージを強めていた。これは、CG 画像のみで景観を評価している A-GR に対して、B-GR はダム工事現場を実際に眺めていることにより、画像の景観イメージに現実感が加わったことが印象度の違いとして表れたと考えられる。また、下流広場の植栽量の差については、空間の境界部に植栽を配置したケース 1 が、広場全域に植栽を配置しているケース 2,3 に比べて好印象を示していた。

c) 視点場C

視点場Cは、ダム天端から湖面を望む視点場であり、天端の高欄タイプを変えている。

A-GR は、ケース 1（石材）よりもケース 2（植栽）、3（木材）に好感度を示しているが、B-GR は各ケースとも好感を示している。これは、CG 画像のみを提示した A-GR に対し、実際に現地での位置関係を見ていることから、周辺山並みや湛水後の湖畔の景観をイメージすることに起因するものと推測される。

6. まとめ

以上の調査結果から

a) B-GR が A-GR に比べて、ダム空間を好意的に捉えていたのは、B-GR はダム空間に足を運び、現場でダムの役割や工事概要等の説明を受け、実際に現地の視点場や形成される空間を見た後で、アンケートを実施したことにより、ダムに関する様々な情報が提供され、理解されたことが理由と考えられる。B-GR の被験者は、現場見学に参加するなどダムに対する興味、関心が高かったことも、ダムに対する好感度を高めたと考えられる。この結果は、札内川ダムでの景観事後評価調査結果と同じ傾向を示している。

b) 感性的な判断に左右される景観イメージなどで、情報の提供の仕方などによる認識度の違いにより、その評価が変わることから、今後ダムなどの公共性の高い事業の合意形成を図る上では、十分な情報の提供による認知度の向上策や、事業計画の評価に関わる感性に起因する項目など、感性特性の分析が必要であると考えられる。

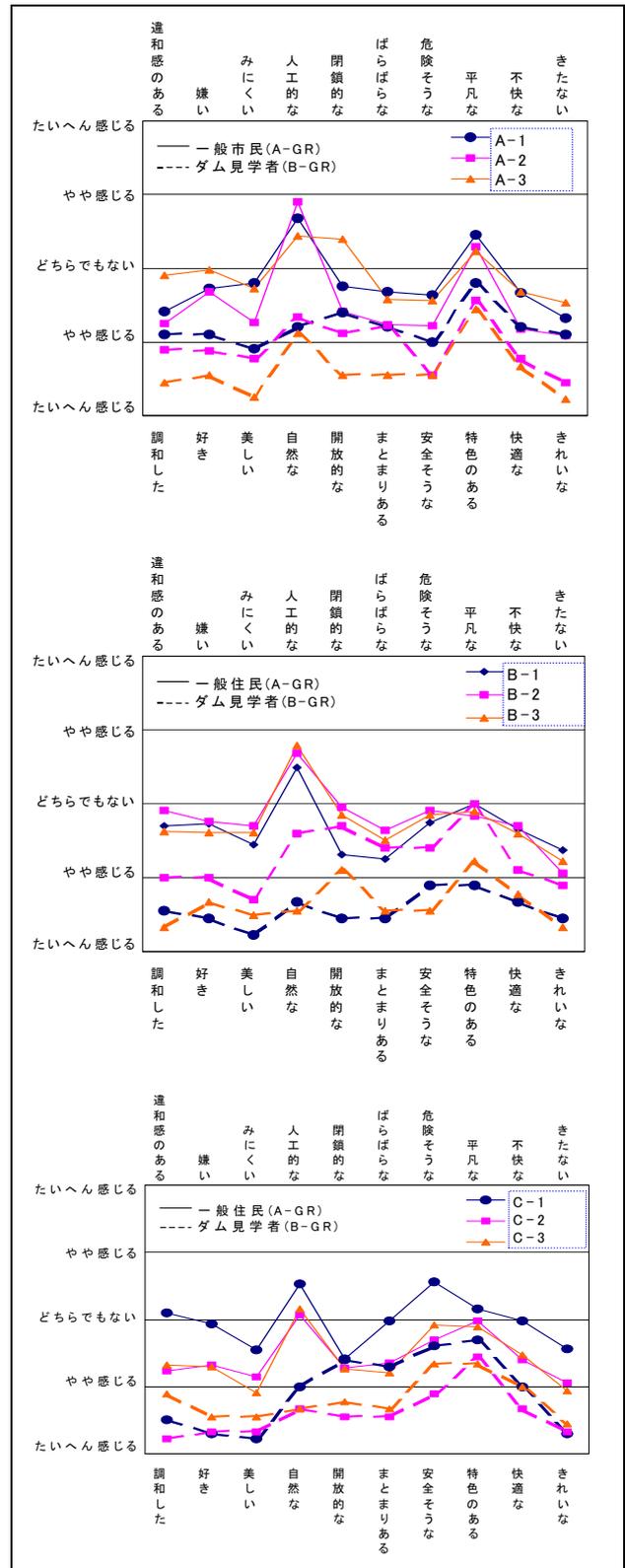


図 3. アンケート結果

参考文献:井出康郎 他:河川整備事業の事前評価に関する研究、土木学会第 58 回年次学術論文集 2003 年 9 月
井出康郎他：ダム景観に影響する視点場と景観要素に関する実験的研究、河川技術論文集第 7 巻 2001 年 6 月